

新型コロナウイルス感染症は博物館コミュニティにどのような影響を与えたか デジタル化の影響とシニア世代への影響について

佐久間大輔*・和田 岳*

要 旨

COVID-19 新型コロナウイルス感染症による、大阪市立自然史博物館周辺のミュージアムコミュニティへの影響を、年代別に来館者、友の会、YouTube 利用者についてそれぞれ分析した。閉館や観察会などのリアルなイベントの減少により、博物館との接触タイミングが減少しているために来館者総数や友の会新規入会などの指標は低下しているが、一日あたりの来館者数や友の会退会率などからは各年代とも大幅な悪化は見られていない。YouTube 利用者層はシニア世代も多く、年齢による重大なデジタルデバイドは確認できなかった。今後、デジタルでの博物館との接触から来館や友の会への入会など、各コミュニティ間での流動を促す努力が重要だろう。

キーワード

COVID-19 新型コロナウイルス感染症、友の会、YouTube、大阪市立自然史博物館

2019 年末に発見された新型コロナウイルス感染症は、日本社会にも大きな影響を与えた。博物館もまた例外ではない。2020 年 2 月以降、イベントの中止、常設展示の臨時休館、特別展の延期や中止、そして出勤抑制もふくめ博物館活動が大きな制限を受けた。中でも観察会や現地見学会をはじめとする対面行事は、人と人の距離を十分に確保することが難しく、また、府県を越えた参加者も多くなりやすく、時期によっては開催が難しかった。人と人の距離の確保、府県をまたぐような移動の抑制、接触の回避などは博物館を始め多くの社会教育施設での活動を困難にしていた（橋本 2021）。

特に高齢者に対しては、重症化リスクが高いと言われ、外出抑制が強く呼びかけられた。一方で結果としての活動の低下による身体不調やメンタルヘルスへの影響への懸念が表明され、対応としての社会的関係の維持や情報提供の強化が呼びかけられてきた（木村ら 2020; 重村ら 2020; 中井ら 2021; 飯島 2021）。こうした中で博物館を始めとする社会教育施設は様々な対応努力をしてきた（例えば栗山 2020; 川邊 2021; 萩野 2020; 長塚 2020）。

大阪市立自然史博物館（以下自然史博物館）もコロ

ナ禍の中でオンライン対応など様々な工夫を試みてきた（佐久間 2021、大阪市立自然史博物館 2021）。だが博物館だけでなく博物館を取り巻く「ユーザー・コミュニティ」も大きな影響を受けている。友の会の会員数も来館者数も減少する中で、本稿ではコロナ禍が約 2 年続いた 2022 年 1 月の時点における自然史博物館をめぐる利用者コミュニティについて、年代別の動向を主に統計資料から検討したものである。

1. 来館者の動向

自然史博物館では 2020 年度、2021 年度に入館者は大きく減少した。コロナ禍以前には常設展示には年間 20～29 万人が訪れていたが、2020 年度は 102,488 人と大きく減少し、2021 年度は少し回復したものの 1 月時点で 120,399 人とどまっている。2022 年 1 月以降は第 6 波の影響下にあり、年間 16 万人程度と予想されている。この入館者減は開館日数の減少による影響が大きい。コロナ禍期間の自然史博物館の休館は 2020 年 2 月 29 日～6 月 1 日、2021 年 1 月 14 日～2 月 28 日（緊急事態宣言の発出されたこの時期は当初より工事休館の予定であっ

*大阪市立自然史博物館

た)、2021年4月25日～6月20日である(2021年3月までの休館動向は大阪市立自然史博物館(2021)にまとめられている)。入館者の減少は、外出自粛要請や自粛の長期化による来館意欲の低下も原因の一つと考えられる。大阪府では休館期間以外の開館している時期にも長期に渡って「大阪府イエローステージ(警戒)」「大阪府レッドステージ(非常事態宣言)」、国の「まん延防止等重点措置」、国の「緊急事態宣言」が続き、2021年10月1日から2022年1月26日を除き「不要不急の外出の抑制」「府県をまたぐ移動の自粛」が続いた。前述のように、特に高齢者の外出は抑制が呼びかけられたこともあり、これら開館期間の来館者への影響は年代により影響が異なることが予測された。

表1に、大阪市立自然史博物館館報(大阪市立自然史博物館2018,2019,2020,2021)の公開情報及び未発表資料によって、年代別の来館動向および減少率を検討してみた。休館の影響を排除するため、年間の入場者を開館日数で割った「1日あたりの平均入場者数」で示している。コロナ禍前3年(2017～2019年度)の平均とコロナ禍のさなかである2020年度及び2021年度12月までの状況の比較として示した。来場者の年代は、改札での区分を活用しているため、無料となる中学生以下、高校生・大学生、大人(市外在住の高齢者を含む)、そしてやはり無料となる市内在住の65歳以上の高齢者、その他の免除者となる。団体入場者は上記の各年代に振り分けている。

「不要不急の外出自粛」や、「都道府県をまたぐ移動」が抑制される中で、1日あたりの入場者数は全体で3割近く減少している。この中にはコロナにより中止になった大阪自然史フェスティバルなどの無料イベントの影響が含まれている。2日で2万人近い来場者が訪れるこのイベントが中止になったことの影響は大きい。このフェスティバルの入場者数は、「その他」の категорияに含め、年代別の分析への影響は除いている。

年代別に見ると、最も減少したのは「中学生以下」

表1.コロナ禍前後での開館日1日あたりの入館者数の変化

		大人	高・大生	中学生以下	(うち団体)	(うち個人)	高齢者	その他※	全体
コロナ禍前	H29-R1 平均	337.6	20.5	327.5	149.6	177.8	21.1	106.5	813.3
コロナ禍以降	R2-R3 平均	269.0	16.6	236.4	71.1	165.3	18.6	30.9	571.5
	減少率	20.3%	19.0%	27.8%	52.5%	7.0%	12.1%	71.0%	29.7%

カテゴリについては本文参照

※その他には大阪自然史フェスティバルなどでの無料入館者を含む

であり、次いで減少幅が大きいものから大人、高校・大学生、市内の高齢者の順となる。中学生以下のカテゴリーには遠足などの団体利用が4割近い。家族などでの個人利用と分けて検討してみた。遠足利用はコロナ禍以降、開館日あたり149.6人から71.1人と半分以下に減少している。実数では令和元年の40,461人から令和2年には11,819人と三分の1以下に減少した。令和3年度はやや回復したが12月末で15,897人ととどまっている。一方で個人や家族で訪れた中学生以下はコロナ前に1日177.8人であったものが165.3人と7%減の微減にとどまっている。

「大人」の減少は、表には示していないが細かく内訳を見ると、周遊バスや特別展などとのセット券利用者が減少が目立った。周遊バスの減少は観光などで利用する来館者(外国人などのいわゆるインバウンド利用を含む)の減少を思わせる。このカテゴリーに市外の高齢者が含まれていることから、やはり遠距離からの利用が減ったと考えて矛盾がないだろう。数量的な根拠はないが、友の会関係者などの声を聞くと、近隣府県からの来館を長く控えていたという声も聞く。こうした層は特別展などに目的を持ってやってくる利用者である。なお、数字は分けていないが「高校生・大学生」も中学生以下同様に団体の減少幅が大きい。そして、市内の高齢者は大人よりも減少幅が小さくなった。

全年代に影響を及ぼしうる減少要因としては公的な自粛要請、心理的な自粛のほか、講演会や植物園での観察会中止などによる来館動機の喪失、特別展の減少(令和2年度はマスコミとの巡回展示を中止とした)などの要因があげられる。こうした影響が前述の近隣府県からの「大人」の来館者に強く影響したとしても不思議はない。

こうした悪条件にも関わらず、近隣からと思われる親子連れ利用や市内の高齢者の利用などが1割減少程度の比較的堅調といえる状況にとどまった。一方、遠隔地からの利用、遠足など団体利用、自然史フェスティバル利用者、インバウンド利用者などが大きく影響を受け、全

体としての来館者利用減少につながっていることがうかがえた。

団体利用や大型イベント来場者に比べ、個人の利用者の開館日あたり来館者数が大幅な減少をみせなかった理由をどう捉えられるだろうか。博物館への来館意欲に大きな変化はなかったといえるのではないだろうか。それらの意欲を支えた要因としては1. 植物園と一体になった博物館が比較的開放的な空間と受け止められ、安心な場所として認知されていたこと。2. 利用者にとって、特別な場所ではなく、日常的な行動圏の中に位置づけられていたこと。3. 閉館中のデジタルメディアなどを通じた活動で興味を持続させた、などが考えられるだろう。

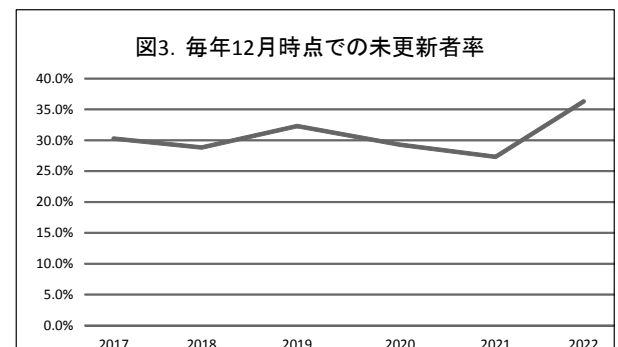
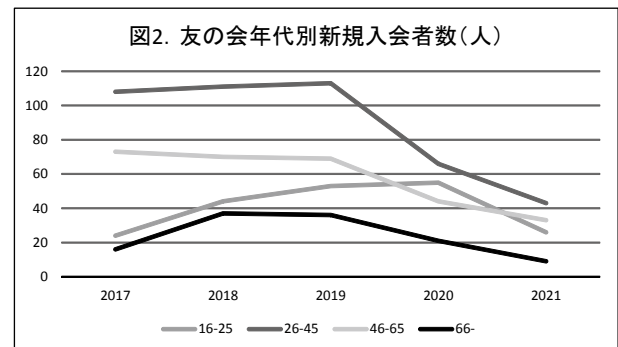
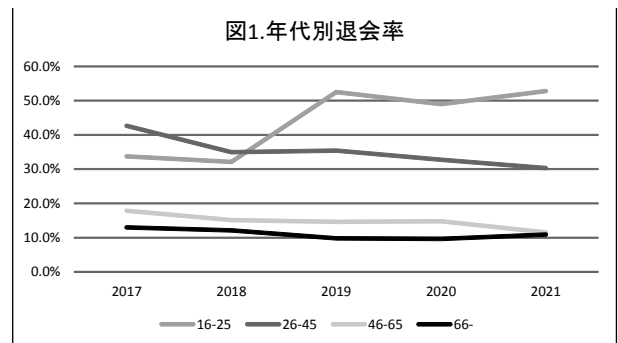
開館日そのものが大幅に減っているために、どの世代も確実に年間来場者数は減少を見せている。博物館が社会に与える教育成果の総体、ソーシャル・インパクトは減少した、と言わざるを得ない。その一方で、開館日一日あたりの来館者数は、市民の「博物館で学びたいという意欲」は落ちていないことを示している。

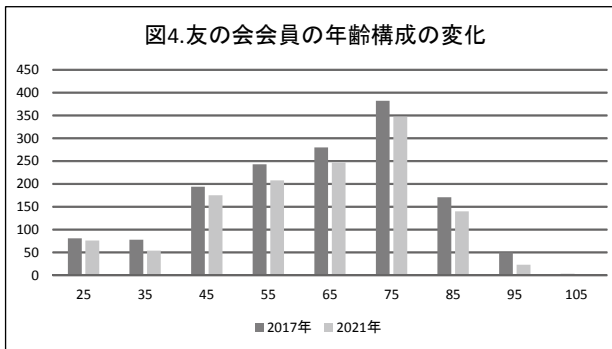
2. 友の会コミュニティ

大阪市立自然史博物館友の会（以下友の会）は博物館をよりよく活用して学習する人々の組織である。継続的に利用するリピーターであり、より深く学ぶ博物館の教育活動の中心的存在である（横川 2020）。同時に博物館友の会は地域社会と博物館とをつなぐための組織という側面を持っている。2020年以降、博物館の活動がCOVID-19により大きな影響を受ける中、大阪市立自然史博物館友の会も大きな影響を受けている。会員数は2017年度1,639名（1年会員1,328名、年度途中の加入者224名、賛助87名）だった状態から2021年度1,477名（1年会員1,215名、年度途中の加入者161名、賛助101名）にまで9.9%の減少を見せている。

減少に年代別の傾向があるかを調べるために、友の会の事務局である認定特定非営利活動法人大阪自然史センター（以下自然史センター）から、個人情報除去した会員データを2021年12月末に提供いただき、解析を試みた。友の会は「家族の誰か一人が会員であれば家族全員会員」という家族会員制度をとっていることから、親の名義で会員になる場合と、子どもの名義で会員になる場合の両方がある。このことから、今回は便宜的

に15歳以下の会員に対しては一律に目安として第一子の母の平均出産年齢である31歳（<https://www.jinji.go.jp/hakusho/h29/1-2-01-1-3.html> 2022年2月11日参照）を足して親の推定年齢とし、解析を行った。友の会の更新は毎年1月である。2016年会員であった人のうち、2017年に最終的に会員継続せず退会した割合を2017年の退会率、前年以前に会員でなく2017年に新規入会した人を新入会員数とした。これを図1、2に経年的に示した。退会率は1月以降に会費の更新を行う人も多いためこれを含めて計算している。このため、2022年の退会率はまだ確定できない。便宜的に毎年12月までにまだ更新していない人の割合を「12月時点での未更新者率」として計算した（図3）。なお、会員登録の際に年齢を明らかにしない方も1割強いるため、合計は会員数にならない。この解析において、2020年1月はまだ行事なども大きな影響を受けていないことから、2019年から2020年への会員更新にはコロナ禍は大きな影響を及ぼ





していないと考えられる。一方、2020年2月以降の行事中止や休館などにより、2020年新入会員数や、2020年から2021年会員への更新、2021年の新入会員数そして2021年から2022年会員への更新にはコロナ禍が大きな影響を及ぼしていると考えられる。なお、全体としての会員年齢構成は2017年と2021年で大きくは変化したようには見えない（図4）。

大阪市立自然史博物館友の会の場合、図1からも読み取れるように、元々毎年2割前後の退会者がおり、ほぼ同数の新規加入者がいるという状況になっていた。これは、過去20年近く一定している傾向である。これは、興味を持って参加したが実際にはあまり参加できなかったため継続しなかった人などの他に、小学生世代の子どものとともに加入し、子どもの成長によって家族参加が少なくなり退会する場合、学生で会員になったが転居に伴い退会するケース、博物館実習などを契機に会員になったが卒業などとともに退会するなど、構造的な要素も大きい。このように、継続の動向はもとより年代による違いがある。

年代を高校生・大学生に相当する25歳以下、中学生までの子育て世代に相当する26～45歳以下、およびその上の世代である46～65歳以下、シニアとしてそれ以上の世代に分割して動向を調べた。関係解析の結果、コロナ禍以降で退会率が顕著に増加した年代は見当たらなかった。25歳以下は元々退会率の高かった年代であり、さらに母数が比較的小さいため、実習参加者数などにより変動しやすい。退会率には若年層の厳しい経済状況も関係しているだろう。26-45歳の年代はむしろ退会率が減少している。これは、後述のように、この年代での新規入会の減少と呼応している。新規の入会が少なかったために、短期間での退会も少なかったのではないだろうか。そのほかの年代に大きな変化はない。高齢者の退会

率も特に増加している傾向は見られなかった。暫定的ではあるが2021年から2022年会員への切り替えの12月時点での動向も同様であった。コロナ禍の2年目となる2022年への更新への影響も気になるところだが、図3では2021年12月での未更新率の若干の増加が見られた。来館頻度の減少による会費納入機会の減少であったと思われる、オンライン更新などのアナウンスをすることで2022年1月には継続率はほぼ平常値に回復している。

図2を見ると、会員数の減少の原因は明らかに「新規加入の減少」にあることがわかる。すべての年代でコロナ禍の影響を受けた2020年および特に2021年で減少しているが、特に26-45歳の幼児から小・中学生にかけての親世代の新規加入の減少が激しい。その上の46-65歳の年代でも大きく減少を見せている。通常年では比較的多い65歳前後の新規加入も減少している。コロナ禍がさらに長期化し、この結果が積み重なり、加えて高齢化が進んでいくと、図4の会員の年齢構成が大きく変化していくことが予想される。

親子での参加が基本の友の会にとって、子どもの成長に伴う退会はやむを得ない部分がある。一方で新規加入は家族で観察会に参加したなどの体験がきっかけになることが多い。来館しての体験もきっかけの一つであり、特別展などは初めての来館のチャンスになりやすい。こうした機会は、博物館での学びに触れるチャンスであるのと同時に、博物館で学ぶ人々（＝友の会会員）の姿に触れるきっかけでもあった。ところが、2020年以降多くの観察会や館内での対面のイベントが中止となり、ワークショップもオンラインコンテンツに変わってしまった。その結果、友の会との接触が減り、新規入会が減ってしまったというのが、推定されたシナリオである。コロナ禍は、会員数の減少を通して博物館友の会の経営にも影響を与え得るが、今のところは退会率の極端な増大など破滅的な状況にはつながっていない。しかし、この年代の親子にとって、自然により深くふれあう機会を逸失していることにもなっており、長期化は好ましくない。2-3年という期間は中高生などにとっては先輩、後輩間での文化継承が困難になる期間である。退職直後のアクティブなシニアが新たなライフワークを見つける期間をのがしてしまう可能性もあるだろう。改めて対応が必要と考えている。

3. オンラインコミュニティ

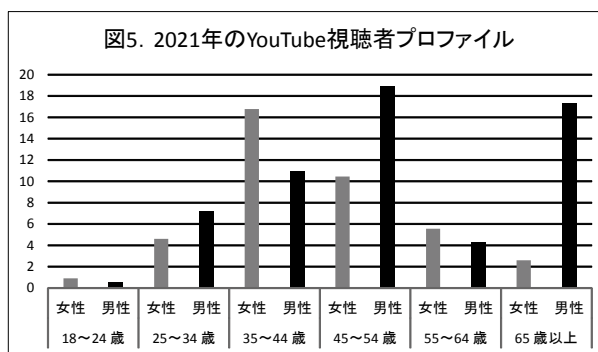
こうした中、博物館は世界的に急速なデジタルシフトをみせている。対面でのギャラリートークはYouTubeなどの動画コンテンツになり、博物館もSNSでの発信を強化している。

大阪市立自然史博物館でもTwitter、Facebookのフォロワーは順調に増加している。中でも大きな成長を見せたのはYouTubeであった。現状（2022年2月現在）で自然史博物館には10,541人のTwitter follower、2648人のFacebook page follower、2574人のYouTubeチャンネル登録者を数えるまでに至っている。TwitterおよびSNSについては佐久間（2018, 2020）で報告したことから、今回はYouTubeに絞って報告する。

現在博物館YouTubeチャンネルからはこの2年間、毎月のオープンセミナー、そして収蔵庫からの解説トーク動画、各種のシンポジウムなど毎月2-4番組がほぼコンスタントに公開されている。友の会の総会や講演会もオンライン、小さなサークルや研究会のミーティングにもZoomなどのweb会議が使われるようになった。博物館の会議室やセミナールームがオンライン移行しているような状況だ。

オンラインのコンテンツは、博物館から離れた地域に住んでいる人でも楽しむことができる。また、移動が困難な人でも参加できるという利点がある。ライブ放送以外にオンデマンド配信などを行っているコンテンツであれば、開催予定に縛られず、自分の好きな時間で視聴できるという利点もある。

ただし、デジタルシフトは必ずしも万能ではない。博物館側のデジタル化、ノウハウ、設備投資の問題を別にして、利用者にとっての課題を挙げると、1) インターネット利用環境や機材などの基盤格差、地域や経済的格差の影響を受けやすい。2) 利用のノウハウの不均衡がある。3) 体験的学習を補うことができるか、検証が十分でない。4) 利用者間の交流など協同的学習観に関わる部分の開発が不十分である。5) 博物館と地域の結びつきの希薄化、などがあげられるだろう。実際に利用者、あるいは利用できていない人が何を利点と感じ、どこに満足あるいは不満を感じ、どういった点に難しさを感じているのかといった評価は今後の研究が必要だ。アンケートやディープインタビューで判断していくべきだ



ろう。現在、博物館では簡単に周囲の利用者からの反応を基に、より広い参加者のためには動画配信のプラットフォームとしてYouTubeを、双方向の参加が必要なやりとりのためにはビデオ会議システムとしてZoomを中心に活用している。Zoomは単体での利用だけでなく、YouTubeなど他のメディアへ流し込むための連携ソースとしても活用している。Zoomを使うことで上記の4)にあげたような双方向型の学びにつながる部分も作れる可能性があるようにも思われるが、多くの利用者にとってZoomは比較的ハードルの高い環境となる。より幅広い利用者を想定した普及事業のためには、Zoomなどのビデオ会議利用とした場合に2)を乗り越えることができない参加者が多い可能性を考えた。これに比べるとYouTubeはパソコンならブラウザのみでも十分利用でき、スマホでも多くのユーザーがアプリで既に利用している媒体であり、かなりハードルが低い。このため、講演会などではYouTubeを中心にしている。

では実際にどのような層が博物館のYouTubeチャンネルを視聴しているのか。YouTubeのチャンネルアナリティクスを用いて2021年1年間の視聴者プロフィールを図5及び表2に示す。このプロフィールはYouTube視聴者情報を機械的にGoogleが解析しているものである。この結果によれば、番組視聴者の2500人超の登録者がいるが実際には総再生数の84.5%、総再生時間の70.7%までを未登録者が占めている。この数値は時期によって多少変動するものの、常に7~8割を未登録者が占めている。開拓の余地が非常に大きいと考えているが、平均視聴時間を見ると未登録者が5分13秒に対し、登録者が11分48秒となっているため、より興味の強い視聴者がチャンネルを登録していると考えられる。より幅広い視聴者を得るためには簡潔にメッセージを伝える動画も必要なのかもしれない。男女比率は常にやや男性に

偏っているのもコンテンツの特性であろうか。視聴時間の85.3%までが日本の視聴者とされる。他のユーザーの国名が不明なことから、海外から15%近いアクセスがあるというよりは、アクセス元不明の利用者がいると考えるべきだろう。

図2に示した視聴者の年齢分布は興味深い結果となった。35歳から44歳およびその上の54歳までの層が最も多く、65歳以上が3番目に多い利用者層となった。こちらも、登録アカウントは親のものである可能性が高いことから、特に35-44歳層などは親だけでなく子どもの視聴の可能性も高い。リアルな集団である友の会とかなり似たユーザー層がネット上の利用者層にも構築されている点は興味深い。そしてこのデータで見ると、コロナによる急激なデジタルシフトにおいても、65歳以上も、構成比で言えば友の会よりも少ないものの、博物館ネットコミュニティで完全に置き去りにされているということまではないようである。

友の会の世話役や研究サークルなどの参加者には、Zoom利用を勧めている。彼らは今後コンテンツの送り手にもなってもらう人々でもあり、運営上も双方向の意思疎通が非常に重要になる。このため、たとえZoomが機材、操作、自分の顔や背景に自宅などがうつるという心理面でも「ややハードルが高い」ということをわかった上であえてZoomに慣れてもらっている。実際に使ってもらくと、70代や80代の参加者でも、「会場での講

演よりスライドが見やすいし、講演も聴き取りやすい」、 「何より出かけなくていいのが楽だ」などの声が出ている。もっともそうは言っても機材がないシニア層や、やはり参加に気乗りがしていない層もいる。誰一人置き去りにしない、という理想にはまだまだ届かないが、博物館周辺の活動の担い手には、将来そうしたシニア層をサポートしてもらうためにも、オンラインコミュニティを運営するスキルを身につけてもらうよう努力している。

オンラインでの教育活動は今後、数だけでなく、学習の効果なども問われていくであろう。同時にメディア側もさらなる双方向性が改善され、技術的には協同的学習観を重視したワークショップ運営や、オンラインでのサークルなどでの指導に正統的周辺参加といえるような取り組みができるようになるかもしれない。現在は、画面の手前の学芸員同士でコミュニケーションを演じて見せたり、一方的な教授プログラムが多くなってしまっているが、まだまだ工夫の余地はあるし、さらに様々な工夫ができるようになるだろう。それが実現できるまでに、博物館としてはしっかりと利用者を開拓するとともに、担い手の養成もしっかりと検討していく必要がある。

4. おわりに

大阪市立自然史博物館の来館者、友の会、YouTube利用者についてコロナ禍以降の年代別変化を検討してみた。コロナ禍による閉館や行事制限のために市民が博物

表2. YouTube 大阪市立自然史博物館チャンネルの視聴者プロフィール(2021年)

登録状況	合計	未登録	チャンネル登録済み
視聴回数	89,267	75,434 (84.50%)	13,833 (15.50%)
平均視聴時間	6:14	5:13	11:48
平均再生率	18.50%	18.70%	18.10%
総再生時間	9,293.00	6,572.00 (70.70%)	2,721.00 (29.30%)
性別		女性	男性
視聴回数		40.40%	59.60%
平均視聴時間		4:40	5:01
平均再生率		29.90%	30.20%
総再生時間		38.70%	61.30%
地域		日本	
視聴回数		81,896 (91.70%)	
平均視聴時間		5:48	
総再生時間		7,925.40 (85.30%)	

館に接する機会や友の会に触れる機会が減少しており、そのことにより来館者数や友の会会員数などが影響を受けていることがうかがえた。しかし一方で、一日あたりの来館者数や退会率を見る限り、博物館を利用して学びたいという意欲が減少している様子は見られなかった。

しかし、長期化によって学ぶ機会を奪われる世代が生じたり、世代間の伝承が途絶えたりすることは好ましくない。世代間の伝承は学生だけの問題ではない。シニア層の中でも、シニア層と現役層の間にも世代を超えてつながなければいけない情報、文化はたくさんある。和田(2018)が報告した「賢者の間」のシニア層をはじめ、外来研究員たちは職員同様来館の抑制をせざるを得ず、また閉館によって全く来館ができなくなった。中には長期の閉館の結果、来館が途絶えたままの外来研究員もいる。どのようなリカバリーが必要か検討していきたい。

来館者、友の会、YouTubeの動向を個別に調べたが、今後、これらを相互にどうつないでいくのかを考える必要がある。来館者にYouTubeなどのオンラインサービスに気付いてもらうことも重要だろう。YouTube視聴者が実際に博物館を見に行きたくなる、友の会に参加したくなる。どの入り口からでも次の展開へのきっかけとなるような、立体的な取り組みとしていきたい。

2020年2月以降のコロナ禍対応のごく初期に「来館ができなくてもYouTubeなどで学び続けることができる」という目標設定は一定程度実現できたのかもしれない。

【引用文献】

- 橋本佳延. 2021. 新型コロナウイルス感染症拡大による兵庫県下の博物館の臨時休館および再開後の対策. 人と自然 31: 99-115
- 飯島勝矢. 2021. 5. フレイル健診 COVID-19 流行の影響と対策: 「コロナフレイル」への警鐘. 日本老年医学会雑誌. 58(2): 228-234
- 川邊咲子. 2021. コロナ禍における歴史文化資料の保存・活用のための新しいスタイルの模索. 情報知識学会誌 30(4):427-431
- 木村美也子・尾島 俊之・近藤 克則. 2020. 新型コロナウイルス感染症流行下での高齢者の生活への示唆: JAGES 研究の知見から. 日本健康開発雑誌 41:3-13
- 栗山究. 2020. オンライン学習会「コロナ禍における住民と地域博物館」から見る地域博物館実践の課題と展望. 立正大学教職学教育研究会センター年報 2:91-101
- 長塚隆. 2020. 新型コロナウイルス感染症の拡大と図書館. 日本農学図書館協議会誌: 199: 8-14
- 中井雄貴・富岡一俊・谷口善昭・竹中俊宏・牧道飛雄馬. 2021. COVID-19 対策に伴う外出自粛時期の地域在住高齢者における身体活動量変化 — 運動教室に参加していた高齢者を対象とした調査 —. 理学療法科学 36(1):35-40

い。しかし、現状のオンラインプログラムにはまだまだ学びを深めてもらうためには多くの課題・限界がある(佐久間投稿中)。将来的にはバーチャルな地域や時間を越えた学びと、リアルな展示室での体験がどのような補完関係になっていくのだろうか。コロナ禍は社会的関係を再構築していく社会教育施設、そして博物館の役割を改めて見つめ直す必要を突きつけている(荻野 2020; 佐久間 2020)。「博物館というメディア」をめぐって様々な検討を深め将来計画を検討していく必要があるだろう。

来館者や、友の会、ネットコミュニティ以外にも、博物館は様々な部分でコロナ禍の影響を受けた。例えば、過去2年、家族あるいは本人が慢性疾患やハイリスクを抱えている学芸員は活動を慎重にせざるを得なかった。離島や中山間地の多い自然史系のフィールドを抱える学芸員は調査や資料収集で大きな影響を受け続けている。特別展示や教育普及活動に至るまでコロナ禍は様々な要素で現場に悪影響を与え続けている(大阪市立自然史博物館 2021)。こうした逆風の中でも、どのような影響緩和あるいは発展が可能か、様々な模索も続け、その成果と現状とをよく分析し、今後も検討を続けたい。

謝辞: データ準備に認定特定非営利活動法人 大阪自然史センター 池田祐介氏に協力を頂いた。また、本研究の一部はJSPS科研費17H02026の成果である。

- 荻野 亮吾 . 2020. With コロナ時代における地域のつながりづくりの方法 . 日本公民館学会年報 17:57-65
- 大阪市立自然史博物館 2018 大阪市立自然史博物館館報 43
- 大阪市立自然史博物館 2019 大阪市立自然史博物館館報 44
- 大阪市立自然史博物館 2020 大阪市立自然史博物館館報 45
- 大阪市立自然史博物館 2021 大阪市立自然史博物館館報 46
- 佐久間大輔 . 2018. 自然史系博物館をとりまく重層的ネットワーク『ミュージアムのソーシャル・ネットワーキング』博物館情報学シリーズ 3 . 樹村房、東京 .
- 佐久間大輔 . 2020. コロナ禍で博物館の受けた影響、見えてきた価値 . 文化経済学 17(2):1-4
- 佐久間大輔 . 2021. 博物館におけるデジタルメディアの可能性 —ステイホーム期間中の取り組みで学んだこと . 発信する博物館 : 持続可能な社会に向けて (小川義和・五月女賢司編) ジダイ社 :60-76
- 重村淳・高橋晶・大江美佐里・黒澤美枝 . 2020. COVID-19 (新型コロナウイルス感染症) が及ぼす心理社会的影響の理解に向けて . トraumatische・ストレス 18(1):1-9
- 和田岳 . 2018. 自然史博物館の賢者の間 : リタイアした研究者が集う場所 . Musa : 博物館学芸員課程年報 (32), 43-46
- 横川昌史 2020. 大阪市立自然史博物館の友の会と博物館活動 . 博物館研究 55(6):16